

越谷十五編



越谷海岸線

「あどけない話」ではないけれど、「埼玉には本当の海がない」あるいは「越谷にも海などない」などと考えるのは間違いである。遥か昔、縄文時代には埼玉は海だった。現在もまた水ですべてが満ちあふれている。

父なる古利根川は勇壮たる海岸を描いて越谷をかたどるように顕現、母なる元荒川は越谷の軸心を柔らかな弧弦で貫き通し流域を彩る。綾瀬川、新方川、逆川、新川、平新川、会之堀川、御料堀、葛西用水、八条用水、谷古田用水、四ヶ村用水、須賀用水、出羽用水、末田用水。小学三年生の時にならった名前を思い出すだけでも、こんなにもある。その他の小さな用水路や側溝、そして広大な田園地帯を全て合わせたら、その水域の規模は海洋というのがふさわしい。

自転車で、それらの海岸線を走りつづけた毎日があった。細々続く県道を少し逸れて、草群れをかき分けて砂で靴底を擦らせれば、当たり前のように海が現前した。緑色でもあり青くもあった。夕日に照らし出されれば深紅に燃え、朝は黄金の光を放った。これは海以外に他ならず、海以上に海ではないか。

埼玉には海がある。それは越谷に足を運べばすぐに分かることだ。

四号バイパス迄

一億匹のイナゴがさざめくあぜ道を草履で練り歩いて四号線へと辿り着く。

一番近くの電灯は大げさに電力所前と呼んだ。

アスファルトのかけらは夕方以上の熱を貯めこんでいたのですぐに手放す。

真っ赤な光が二手に分かれて見えた。

やがて夜が来ても車の音が通り過ぎていくだけだろう。

四号線を走るのとは私ではない。

私の内を横切るのが四号線であるだけの話だ。

縦横無尽に国道を切り刻む小径の流域面積が人生の広がりやを太陽に示すのです。

前へ進むも後ろを振り返るもない、無限の全部が自分自身でした。

明日自転車でも来たら、同じ場所でも違う色に包まれるのだろう。

寺の鐘の音は遠くて近い、夢の中の心臓音のようで、未来はすべて漲るちからに収束されるものと幻惑されていた。

四囲に高低を表すものは何もない。

遠くに山並みが見えるでもなく、足下を沼沢が横切るでもなし。

風に漂う水の香は普遍の存在だった。

平新川

昨夜の雨のせいで水流は濁っていた
流路は太くなり堤の脇のほころびを広げている
春草の葉先を水が泳ぎ、白い花は喘いでいた
流下の勢いのはざまに黒々と藻の群れが見え隠れしている

田畑なき緑を辿り、畦なき荒れ地を分けて
手繰り寄せるように平新川は存在していた
架かる木橋は風にとばさそうなほど孤独だった
合流するまでの細く短い生き様を
すべて越谷で完結させている

フェンスの向こうに危険かもしれない
季節の移ろいが確かにあった
誰がために水を連ねるのか、誰も近寄って趣を示さない
静かな野生が佇んでいた。誰にも気づかれず
緑の鼓動の一拍一拍に凝固する太陽の鏡面だった

小径

シロツメクサですか？

アカツメクサです。

アオミドロですか？

ホシミドロです。

クローバーですか？

カタバミです。

タンポポですか？

ノゲシです。

新潟川ですか？

新方川です。

少林寺ですか？

勝林寺です。

大相撲ですか？

大相模です。

クイズですか？

久伊豆です。

大竹暗渠口

大暗渠の入口付近で釣りをしている男がいる。

コンクリートは湿っていてズボンを濡らしていた。

トンネルの暗がりからは冷たい風が撫でつける。

意外と緑の匂いがした。

河川なのか排水溝なのか分からない水流は西から東へ辿られる。

男はゴム長を履いていたが足が水面に届くわけではなかった。

魚などまるで釣れない風貌をしている男の目線は対岸のフェンスをとらえているようだった。

川沿いの道は西の田園地帯と東の停車場を繋いでいた。

水はただひたすら男のあしもとで地中に潜り込んでゆく。

太陽が沈み月が昇りゆこうと、何かが始まるわけでも終わるわけでもない。

男が釣り糸を垂らし続けているだけだった。

真冬の逆川

真冬の逆川はひび割れた大地の溝の様。

大古に使命は果たし尽くし、水面に七色の油膜が反射、流れは限りなく澱んでいた。

僕らは死の世界の土底を見極める。

垂直の壁に血管は鉄錆を滲ませている。

弱々しい日差しが匂いを微かに浄化させているように思えた。

橋が見える地点まで併走してみることにした。

春が来るたび、マグマのごとき水は溢れかえり、川は力強く本当の虹を描く。

ただただ、なにも知らなかった僕らだけが、不安げにうつむきながら時間を越え季節を越え宇宙を越え、

太陽に話しかけていたのだった。

堂面

すべてを飲み込んでしまいそうな表面張力の水が堂面の橋桁を強くあらう

突き当たりの信号で待たされる間、橋上の足元は揺らぎ続ける

前を向くだけで、何も迷うことはなかった

水に埋もれるか緑に流されるか、太陽の宣告に従うだけだった

信号が青になると、人も車も自転車も松伏を讃えた

強き水の力に持ち上げられ、野田橋や春日部や吉川へ、自由のままに歩み出す

空ですら水に満たされた今日や明日があり、古利根川は光となって未来も過去も照らし出す

太陽の鏡となった

大松灯台

田圃に向かって突き当たるアスファルトがあった

唐突に切れる路の終わりは緑に対する岬であり埠頭だった

灯台は立ち尽くす俺だ

船は遠く蠢く車

岩礁はまばらな民家

カモメはカラス

フナムシはダンゴムシだ

飽きもせず緑と対峙し比喻する必要もない風にあたり続ける

示す道などいらぬ

ここにいるそれがすべてだった

幻影の大袋

迷路のごとき袋山の路地に分け入り
どこよりも値段が安いという床屋を探した
場所は不明
ただ線路の向こうにあるということだけを聞いていた

大袋は不定形の街区であり余所者には掴みどころの無い幻の地勢を示す
踏切すぐの二俣を過ぎると磁針は乱れて太陽は雲隠れを繰り返す

同じ場所を何度も巡るような
似たような曲がり角を幾度も曲がっては別の小路に出るような
自転車泣かせの細い砂利道をこすりながら
赤と青の回るネオンを見いだそうと汗をかいた

夕暮れ時になりやっと見つけた床屋は確かに安かった
がそれがどこよりも安いのかどうかは分からなかった

ただ
散髪を終え暗くなった夜道に迷うことは何故か無かった

岩槻の東端に流れを発す新方川は、同レベルの小流を集めて太くなり、逆川の下を潜って越谷北西部を南西方向に流下。

古利根川は越谷東縁で、庄内古川、新方川、元荒川の順に流れを合わせて大河川となるが、名前を中川と変えてしまう。上流では中川と呼ばれる庄内古川が「本流」ということになるのならば、少し寂しい気もする。川幅、水量は圧倒的に古利根川のほうが大きいはず。

世界地図を見ながら考えていた。

ガンジス川とブラマプトラ川との関係、チグリス川とユーフラテス川の関係、オビ川とイルチシ川の関係、ミシシッピ川とミズーリ川の関係、アマゾン川とマデイラ川の関係、マーレー川とダーリング川の関係。

などとは全く関係なさそうだ。

蒲生二番線

二番線で待つ電車は上りか下りか分からない

耳をふさいで心も閉じて

跨線橋を一気に駆けおり

乗り込んだら瞳も閉じてみる

イヤホンで時間も閉じた

北へ向かうか南を目指すか

無名歌手の知らない歌を聴きながら

真昼の中空へ身体を預け

長すぎるサボリの午後に試してみた

蒲生はいつも胸の奥にあり

何十年経とうと二番線への走りを忘れない

ただあのとき電車がどちらへ向かったか

それがまったく思い出せなかった

懐かしいだけでは前へは進まない

蒲生の戒律を線路の糧に

その先を描く

虹

元荒川のカーブに虹が架かって空の知恵の輪となる

つのを尖らせたヒバリがトンネルを潜って太陽に現れた

赤い風船が樹上に止まり震えている

葱ぼうずに群がるシジミチョウに学生らは振り向かない

細い橋の円弧と水面の陰影で、四重連星の重力に捕まってしまった

靴ひもを結び直し土手をなぞり歩きだす

翼はどこにも見あたらず何時しか虹も青墨の中に消えていた

神明橋付近

途切れることのない花びらの川が流れる
浅瀬や澱みを避け
もっとも速い水面を示す黒い川の上に
白い川が流れていた

月光の途切れた夜
イメージの中で星は砕かれ
とうとうと黒い素顔を表していた
揺らいでいるのは陰影ではなかった
桜の幹にしがみついても
せき止められることはなく
ただただこの身は新雪にさらされていた

懐中電灯の中でもがきながら
一番近い屋台の灯りを目指して早歩きしていた
風におぼつかぬ切り絵の紙塊が
背中を押されて白い川と平衡し
やがてひとつになった

中島への道

かつては川流に挟まれた島だったのでろう
中島への道は川に始まり川に終わる
車輪が中島に到達すると風は変化する
狭い街道は一心に中島を貫くも
不安定に支流を幾多にも分けるようだった
空気は浅い緑の香りがした
すれ違うダンプカーを尻目に小庭のような神社が佇む
開かれた結界、そのような言葉が浮かんだ
田圃も畑も家並みも何もかもが風に属していた
最後の高みを目指す緑のスロープを一気に駆け抜け
その橋のたもとに立ち尽くし中島を振り返る
水の旅路はお終いだ
父なる古利根と母なる元荒、長子の新方が合わさって
光の大地となった

弥十郎のカブトエビ

小雨ぱらつく曇天下、爆弾と呼ばれる古いタンクが野ざらしに放置されていた。平行に並ぶ二つの楕円球体は、民家の垣根の裏から続く茂りの細道の終点に存在した。外界からは見えぬ木々に隠匿され、湿度の高い空気の張りつめた磁場に僕らは呼吸を止めていた。

爆弾のそばに大きな水たまりがあり外縁は湿地のようになっていた。顔を近づけると水は驚くほどに澄んでいた。生き物が豊富にいるのがわかる。オタマジャクシは集団で群れをなすかのようだった。手で水面をすくってみると大きめのミジンコが活発に動き回るのが確認できた。他の場所ではあまり見ることはなかったカブトエビがたくさんいることを知って、爆弾の地は神聖化した。知っているのは僕らだけだと仮定し誰にも教えることのないよう無言のうちに約束された。それから十年の後。同じように小雨の肌寒い朝、急に思い立ってかの地へ一人で行ってみた。がしかし、見つけることはできなかった。入り口となる民家すら見出すことができず、何度も路上を行き来して、諦めた。カブトエビとオタマジャクシの天国は永遠の聖地となり僕から封印された。ただ、爆弾は自身の中で不発のうちにいることを僕はいずれ思い知ることになるのかもしれない。

二十歳になったあの日、僕はそんな事を思っていた。

越谷十五編

<http://p.booklog.jp/book/67023>

著者：井上雅英

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tkmuchzw411/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/67023>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/67023>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ